Japanese Association of Educational Psychology

Japanese Journal of Educational Psychology, 1994, 42, 363—372

理想像の分化と内面化に見る非行少年の心理的特徴

伊 藤 美奈子[1]

THE PSYCHOLOGICAL TRAITS OF JUVENILE DELINQUENTS FROM THE VIEWPOINT OF DIFFERENTIATION AND INTERNALIZATION OF IDEAL IMAGES

Minako ITO

The purpose of this study was to clarify the psychological traits of juvenile delinquents, from the relationship between two ideal images (social ideal and personal ideal) and two self images (possible and real). In this study, developmental viewpoint and the relationships among four images were given special importance. 113 juvenile delinquents and 438 high shcool and college students (from 16 to 19 years, meles only) responded to a SD scale containing 17 items of four concepts respectively, and a self-esteem scale containing 10 items. The result showed that the delinquents marked low score in 〈strength and seriousness〉 factors of social ideal image, and high scores in 〈strength, tenderness and extroversion〉 factors of real-self image. This result suggested juvenile delinquents had a self-megalomanic tendency and a weak normative sense. From the profiles of ideal images and the low correlation between the ideal-real self discrepancy and the self-esteem score, it was clarified that young juvenile delinquents had undifferentiated ideal images and their internalization of social and personal ideal was weak, compared with a control group.

Key word : juvenile delinquents, social and personal ideal, developmental viewpoint, differentiation and internalization of ideal images.

臨床の場において展開される人格変容のプロセスは，絶対的で理想主義的な枠組みに拘束された状態から，相対的で柔軟な準拠枠を作り出していく過程ともいえる。そして，この自己内の力動的なプロセスは，青年期の自我発達危機とその解決への道のりに相通じる（Masterson, 1972）といわれる。

この準拠枠の変遷過程について，認知発達という観点から言及したものとして，道徳性の発達に関する諸理論が挙げられる。たとえばPiaget (1932) は，幼児期の道徳性は，善悪の基準が親などの権威により外的拘束として与えられる他律的なものであるが，その後，仲間との協同活動を通じて相対的・自律的道徳観が形成されると論じている。また，Piagetの考え方を展開させたKohlberg (1964) によると，道徳性の発達は“公正の原理が慣習から分化されていく過程であり，社会の慣習への同調から自己が受け入れている自律的・原理的な道徳的思考の状態へと進んでいく”（二宮, 1991）といわれる。以上のように認知発達理論では，青年期に見られる準拠枠の変化は，“衝動優位の利己性から，他律的規範性，そして自律的規範原理へという規範スキーマの変遷過程”（齋藤, 1990）と公式化することができよう。

この道徳性に関して，とくに規範に対する意識の歪みや未熟さという観点から問題性を指摘されるのが非行行動である。これまでの研究では，非行に走りやすい少年は，発揚情性・自己顕示性・衝動性という心理的特徴をもつことが多いと指摘されており，規範意識

[1] 京都大学教育学研究科 (Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyoto University)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

と非行行動との関連についても，実証的に検討が進められている。たとえば，非行少年の道徳性の発達を検討した小林(1989)によると，非行少年は一般高校生に比して，道徳性判断のレベルがやや低いということが報告されている。また，Hudgins & Prentice(1973)では，Kohlberg法に基づいて査定された道徳判断発達段階と，非行の深化の程度とを検討した結果，非行が深化するほど道徳性発達は低い段階にとどまることが多いと結論づけられている。さらに高校生を対象とした調査(鈴木・西村・高橋, 1989)からも，“非行体験の多い者ほど校則，社会規範，法規範等の諸規範に対して反発や拘束を感じている”という結果が得られている。一方伊藤(1993a)では，非行群と一般群とを対象に，個人化・社会化の指標とされる個人志向性・社会志向性尺度を施行した結果，非行群は“社会的ルールの遵守という点での自己評定は低いが，個性や独自性は強い”という“自我拡張的”(清水, 1985)な意識構造を有することが見出された。これは，青少年が反社会的逸脱行動に走るには，自己顕示的で発揚的な性格特性や規範意識の低さが意味する“発達の未熟さ”だけでなく，社会性を随伴しない個人化方向への突出という“発達のアンバランス”が背景にあることを示唆するものといえる。

しかしその反面で，施設(少年鑑別所)収容中の少年を被験者とした調査からは，“施設収容少年のほうが規範意識が高く，逸脱行為に対しても非受容的である”(総務庁青年対策本部, 1989)という結果も報告されている。この，現象面と相矛盾する結果については，施設収容という特殊状況にある少年が調査対象であるため，“審判に有利なように意識的に反応を歪める防衛や，権威への過度の服従傾向”(斉藤, 1983)が影響したためと解されてきた。しかし，これら諸要因を統制したうえで調査することは困難であり，その後の研究においても非行少年の規範意識の実態については，いまだ明らかにされてはいない。これらの状況的要因を完全に捨象することは不可能であろうが，一般群との得点そのものの比較検討に終始するのではなく，“下位尺度間の潜在的な構造を明らかにする”(高橋, 1978)ことにより，非行少年が持つ特殊性や，非行を誘発する内的なメカニズムを明らかにしておく必要があるといえる。さらに規範意識の低さと非行という行為との間の相関だけでなく，それらを媒介する他の諸要因についても説明の余地が残されていよう。つまり，与えられた規範に対する認知的側面だけでなく，この規範意識がどの程度内面化されているのかという，非行少年個人の機能的構造的な側面についての検討が求められることになる。

ここで，自己概念形成の基準となる“規範意識”を，“自分に対してこうあるべきと考える期待や願望”と定義するとすれば，この意識は“理想像”として具象化されることになる。さらに，人格形成の過程を2つの側面—社会生活に適応していく社会化と，独自の生き方を主体的に獲得していく個人化—から論じるという視点に立てば，理想像にも次の2種類が想定される。まず1つは，社会的期待や慣習を取り入れそれへの適応を方向付ける“社会的理想像”であり，他方は自律的で自我親和的な内容を持ち個性化を方向付ける“個人的理想像”である。

伊藤(1993b)では，これら2つの理想像を17対のSD尺度により操作的にとらえ，それらと“現実自己像”との関連をもとに，青年期以降の発達的特徴を検討した。その結果，青年期(10代～20代)には，外在的規範を取り入れた社会的理想像と，自律的に作りあげられた個人的理想像とが相異なるものとして認知されるが，成人期(30代以降)に入ると社会的理想像が個人的理想像に近づき，これら統合された理想像に現実自己が接近していく過程が示された。しかも青年期では，理想像と現実自己とのずれが自己評価に影響するのに対し，成人になると，自己に対する評価が理想—現実のズレに左右されることは少なくなる，という発達的特徴が明らかにされた。つまり青年期から成人期にかけての発達は，“2つの理想像の未分化”から“分化”へ，“2つの異質な理想像の共存と，現実と理想のいずれへのこだわり”から“2つの理想の統合とずれからの超克”へ，という変遷過程の連鎖として図式化されることになる(伊藤, 1993b)。

このように，理想像と現実自己との関係構造は，認知機能や自我の発達と共変動しながら，年齢に応じた変容の過程をたどると考えられる。では，規範意識や自我の未熟さが指摘される非行少年においては，この理想像と現実自己とはいかなる関係にあるのだろうか。非行という現象を非可逆的な逸脱とみなすのではなく，発達途上の青少年の問題行動として理解するには，上記のようなライフサイクルにおける青年期的特徴を踏まえたうえで，一般的な発達経路からのずれや“未熟”(栃尾・花田, 1991；伊藤, 1993a)という観点から検討する必要があろう。

目　　的

そこで本論では，施設収容中の非行少年[2]を対象に，発達という連続した時系列上でその発生機序をさぐる

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

なかで，行動として顕在化されにくい非行少年個人の内的（心理）構造の特殊性を見出すことを目的とする。指標としては，社会化・個人化という人格形成過程を方向付けると考えられる，“社会的理想像”“個人的理想像”を取り上げる[3]。また，これらの理想像にどの程度近づけると予測しているか，その自己の可能性についての認知をとらえるために“可能自己像”を加えたい。これは，将来の自己についての客観的な予測に目標や期待が加味された“自己に関する知識 self-knowledge の一領域”（Markus & Nurius, 1986）であり，そこには願望的な自己の将来像が投影されると考える。この可能自己と非行性の深度との関連については，Oyserman & Markus（1990）や大橋・鈴木（1992）ですでに取り上げられているが，そこでは，3種類の可能自己（Hoped-for selves, Expected selves, Feared selves）のバランスが問題とされており，現実自己との関連については，いまだ明確な結論が得られているとはいいがたい。本研究では，2つの理想像がどのように分化し内面化されていくのか，またそれは，現在および将来の自己像とどう関連するのかという観点から，非行行動の背景にある心理的メカニズムを検討したい。その際，理想—現実自己の差異と適応との関連を検討するために，適応の一指標として自尊感情尺度を併用する。

方　法

被験者＝非行群男子184人（平均年齢17.43歳，SD1.07），一般群男子高校生216人・大学生222人（平均年齢17.30歳，SD1.29）。非行群に合わせて年齢のレンジは16～19歳とした。発達指標の一つである年齢による違いを検討するため，非行群・一般群とも年少群（16—17歳）と年長群（18—19歳）に2分して分析を行う[4]。

調査時期＝一般群は1991年4～6月。非行群は同年8～10月。

調査尺度[5]＝①SD自己像尺度：17形容詞対からなり，〈強さ〉〈柔和性〉〈外向性〉〈まじめ〉〈落ち着き〉という5つの下位因子[6]を持つことが確認されている（伊藤, 1992）。ただし，本尺度の因子構造は一般少年で得られたものであるので，分析に先立ち非行群のデータ（現実自己像）を因子分析した。その結果，第1因子には〈柔軟性〉が独立して見られたが，第2因子には〈強さ〉と〈外向性〉，第3因子には〈まじめさ〉と〈落ち着き〉がそれぞれ負荷していることがわかった。以下の分析では，非行群と一般群を比較検討するという手続上，尺度項目の内容から鑑みて，〈強さ〉と〈外向性〉，〈まじめさ〉と〈落ち着き〉を独立に得点化し，5つの因子からなる尺度として扱うものとする。このSD尺度に対し［社会的理想像］［個人的理想像］［可能自己像］［現実自己像］の4イメージについて，5件法で回答するよう求めた。教示としては，それぞれのイメージについての説明[7]を加えたうえで，“社会的に見て良いと考える人間”“あなた自身が好ましいと感じる人間”“将来，なれるであろうと思うあなた自身”“今現在のあなた自身”について表わすように指示した。②自尊感情尺度：Rosenberg（1965）のSelf-Esteem尺度。10項目。5件法で実施した。

実施方法＝非行群は，O少年鑑別所に収容中の少年で，技官の指示により各室で個別に実施・回答された。また非行少年群には，内容が歪曲されない程度に，ふりがなや語句の意味などを付記した質問紙を別途作成し用いた。一般群は高校・大学の授業時間に，授業担

---

[2] “非行”という範疇には，触法，犯罪，ぐ犯やその周辺にある不良行為が含まれる。本研究では，被験者とした少年鑑別所収容中の少年たちを，一般群に対して“非行少年”と呼ぶことにする。

[3] これらを個人化・社会化の指標とするにあたっては，青年（10～20代）を対象にした調査結果から，“社会的理想像”は，「まじめで落ち着きのある」規範的なイメージ，“個人的理想像”は「落ち着きには欠けるがおだやか」で自我親和的なプロフィールとして示されていることより（伊藤, 1994b），これらが両概念の一側面をとらえる指標としてある程度の意味を持つものと考える。

[4] 本論では伊藤（1993a）に従い，一般群の高校生vs大学生に対応する年少群と年長群を比較することにより，非行少年の発達的特徴について，1つの示唆が得られるものと考える。ただし，非行発生の背景には心理的要因や環境要因などが複雑に関与しているのであり，年齢差をそのまま発達差ととらえる見方には批判的吟味が必要であると思われる。

[5] 本調査では，①②以外に個人志向・社会志向性尺度を施行したが，その結果の詳細については伊藤（1993a）に譲る。

[6] 「積極的な—消極的な」「強い—弱い」などの〈強さ〉因子，「やわらかい—かたい」「おだやかな—激しい」などの〈柔和性〉因子，「にぎやかな—静かな」「社交的な—孤独な」などの〈外向性〉因子，「まじめな—ふまじめな」「勤勉な—なまけものな」の〈まじめ〉因子，「おとなっぽい—子供っぽい」「慎重な—軽率な」などの〈落ち着き〉因子の下位構造を有する。〈柔和性〉は，伊藤（1993b）では〈おだやかさ〉と命名していたが，項目内容を再検討した結果改称した。

[7] 教示に先立って与えられた説明文は，以下の通りである。「人が理想とする人間像には，社会の人々が一般に“良い”と評価する社会的理想像（そうなるべきと考える人間像）と，人が何と言おうと自分自身が“好きだ”と感じる個人的理想像（そうなりたいと感じる人間像）とがあります。さらに，自己像の1つとして，将来その理想像にどのぐらい近づけるかという“可能性としての自己像”とが考えられます」

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

当の教師により集団で実施された。

結　果

①非行・一般群年齢別の4イメージ因子得点と自尊感情得点の平均

4イメージそれぞれの因子得点を算出し，問題の有無（非行・一般）と年齢（年少・年長）を2要因とする分散分析を行った(TABLE 1)。さらに，非行群と一般群とでは，年齢による得点差の傾向が異なるため，非行・一般群ごとに，年少群と年長群との差の検定（t検定）を行った。

その結果，まず［社会的理想像］は〈強さ〉と〈まじめ〉で問題の有無による主効果（それぞれ $F=23.56$, $p<.01$; $F=13.16$, $p<.01$, $df=3/577$.以下dfは略）が見られ，一般群のほうが高かった。また〈柔和性〉〈まじめ〉〈落着き〉で，年齢による主効果（それぞれ $F=4.20$, $p<.01$; $F=13.27$, $p<.01$; $F=8.34$, $p<.01$）が見られ，非行・一般群別に年齢差を検定したところ，これら3因子の年齢差は一般群でのみ有意であった（それぞれ，$t=2.44$, $p<.05$; $t=4.04$, $p<.01$; $t=3.18$, $p<.01$）。

次に［個人的理想像］については，〈柔和性〉で問題の有無による主効果（$F=6.28$, $p<.05$）が見られ，非行群より一般群のほうが高かった。また［社会的理想像］と同様，〈柔和性〉〈まじめ〉〈落着き〉で，年齢による主効果が見られ（それぞれ $F=5.50$, $p<.05$; $F=11.00$, $p<.01$; $F=8.85$, $p<.01$），この差は一般群でのみ有意であった(t=

TABLE 1　非行群・一般群の3イメージの因子得点と分散分析

	非行群		一般群		分散分析 df=3/577		
	年少群 96人	年長群 88人	年少群 216人	年長群 177人	問題	年齢	交互作用
〈社会的理想〉							
強さ	3.99(.75)	3.85(.72)	4.20(.62)	4.20(.52)	23.56**	ns	ns
柔和性	3.60(.73)	3.62(.60)	3.54(.62)	<3.70(.60)	ns	4.20**	ns
外向性	3.77(.73)	3.64(.61)	3.74(.68)	3.76(.69)	ns	ns	ns
まじめ	3.68(.95)	3.81(.96)	3.87(.79)	<<4.21(.83)	13.16**	13.27**	ns
落着き	3.41(.70)	3.49(.82)	3.45(.63)	<<3.65(.66)	ns	8.34**	ns
〈個人的理想〉							
強さ	3.81(.70)	3.79(.71)	3.80(.69)	+3.93(.69)	ns	ns	ns
柔和性	3.73(.68)	3.83(.66)	3.86(.57)	<3.99(.56)	6.28*	5.50*	ns
外向性	3.75(.87)	3.87(.74)	3.75(.72)	3.81(.80)	ns	ns	ns
まじめ	3.48(.95)	3.63(.85)	3.45(.90)	<<3.75(.94)	ns	11.00**	ns
落着き	3.20(.72)	+3.41(.80)	3.13(.90)	<3.28(.69)	3.08+	8.85**	ns
〈可能自己像〉							
強さ	3.99(.66)	3.98(.62)	3.99(.68)	4.09(.66)	ns	ns	ns
柔和性	3.87(.61)	3.86(.67)	3.67(.65)	<<3.84(.67)	3.99*	4.86*	ns
外向性	3.66(.81)	3.74(.66)	3.80(.77)	3.86(.80)	3.65+	ns	ns
まじめ	4.08(.83)	4.08(.70)	3.91(.76)	+4.04(.80)	ns	ns	ns
落着き	3.82(.75)	3.80(.70)	3.60(.63)	<<3.84(.68)	3.00+	7.84**	4.69*
〈現実自己像〉							
強さ	3.60(.75)	+3.39(.73)	3.13(.75)	3.04(.87)	33.04**	3.19+	ns
柔和性	3.59(.75)	3.46(.66)	3.32(.64)	+3.43(.75)	6.25**	ns	3.85+
外向性	3.58(.97)	3.54(.88)	3.28(.87)	+3.11(.99)	18.08**	ns	ns
まじめ	2.90(.93)	2.88(.76)	2.83(.90)	<<3.13(.95)	ns	6.87**	4.45*
落着き	2.82(.68)	2.82(.75)	2.85(.66)	<3.03(.81)	ns	4.15*	ns
自尊感情	3.28(.66)	3.15(.61)	3.30(.68)	3.29(.67)	ns	ns	ns

注）非行群・一般群内での年齢群間差の検定の結果，<<は1％水準，<5％水準，+は10％水準での有意差を表わす。
（** : $p<.01$　* : $p<.05$　+ : $p<.1$）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

2.29, p<.05 ; t=3.26, p<.01 ; t=2.24, p<.05)。

［可能自己像］については，〈柔和性〉で問題の有無による主効果（F=3.99, p<.05）と年齢の主効果（F=4.86, p<.05）が見られ，一般群でのみ年齢による差が有意であった（t=2.63, p<.01)。また〈落着き〉では，問題の有無と年齢の2要因間で交互作用も見られ（F=4.69, p<.05)，一般群での年齢による差が顕著であった(t=3.63, p<.01)。

さらに［現実自己像］では，〈強さ〉〈柔和性〉〈外向性〉の3因子で問題の有無による主効果が見られ（それぞれF=33.04, p<.01 ; F=6.25, p<.01 ; F=18.08, p<.01)，これらはすべて非行群のほうが高かった。また〈まじめ〉〈落着き〉では年齢による主効果（それぞれF=6.87, p<.01 ; F=4.15, p<.05）が見られたが，この差（年少群<年長群）はとくに一般群の特徴といえる（t=3.28, p<.01 ; t=3.50, p<.01)。さらに〈まじめ〉では2要因間の交互作用も見られ(F=4.15, p<.05)，一般群の年齢による差がとくに顕著であることが示された。

社会的理想像と個人的理想像との分化の程度を調べるために，非行群・一般群ごとに2理想像間の因子得点差の検定（被験者内分散分析）を行ったところ，一般群では年少・年長群とも〈外向性〉以外の4因子で2理想像の得点差は有意であった。一方非行群は，年少群では〈外向性〉以外の4因子で有意な差が見られたが，年長群では〈柔軟性〉〈外向性〉での差のみが有意であった。さらにそれらのF値を比べたところ，非行群はF=5.72～14.68，一般群はF=81.24～110.99となり，一般群のほうがより大きい分散を示した。

最後に自尊感情得点の平均を算出し，問題の有無および年齢を2要因とする分散分析を行った結果，有意な主効果は見出せなかった。

②非行群・一般群の年齢別4イメージのプロフィール

群内における4イメージの特徴を検討するために，それぞれのプロフィールを示した（FIGURE 1)。

まず非行群の4つのプロフィールを概観すると，〈強さ〉〈柔和性〉〈外向性〉の3因子では，現実自己と他

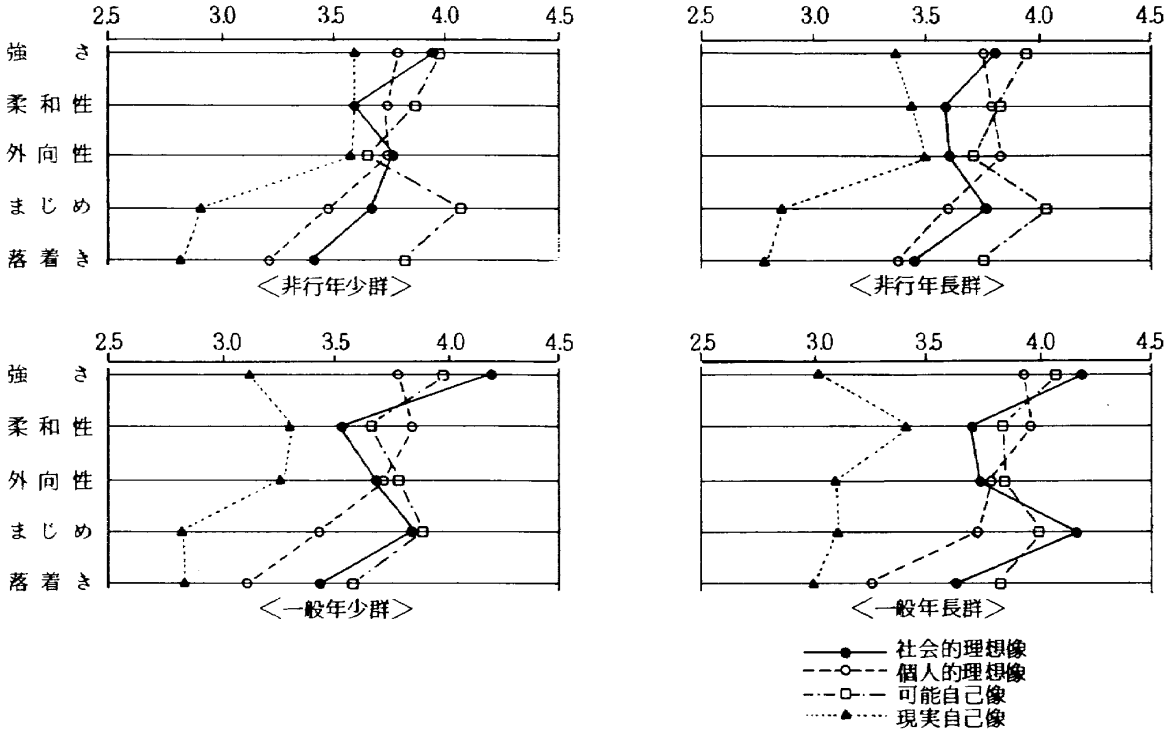

FIGURE 1　非行群・一般群の4イメージのプロフィール（得点のレンジは1～5点）

の3イメージとの差が小さい。一方〈まじめ〉〈落着き〉では，［可能自己像］が極端に高く，ついで［社会的理想像］［個人的理想像］となり，これら3つと［現実自己］との得点差は大きかった。

4イメージの内容的特徴としては，年少群は［社会的理想像］［個人的理想像］ともに〈強さ〉〈外向性〉が高く〈落着き〉が低かった。これに対し年長群では〈強さ〉が高く〈落着き〉は低いという点は共通していたが，［社会的理想像］はそれに加えて〈まじめ〉，［個人的理想像］では〈外向性〉〈柔和性〉が高いという点で質的な差異が見られた。一方［可能自己像］は，年少・年長群とも〈まじめ〉が高く〈外向性〉が低い。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

これは，〈外向性〉〈強さ〉〈柔和性〉が高く〈まじめ〉〈落着き〉が低いという，［現実自己像］とは対称的なプロフィールであった。

次に一般群では，［現実自己像］と他の3イメージとの得点差が，とくに〈柔和性〉〈外向性〉で顕著であった。さらに［社会的理想像］［個人的理想像］［可能自己像］の内容的特徴に注目すると，年少群では［社会的理想像］と「可能自己像］はともに〈強さ〉と〈まじめ〉が高いという近似した形を示すが，［個人的理想像］は〈柔和性〉〈強さ〉〈外向性〉が高く，〈まじめ〉〈落着き〉は低かった。一方年長群でも，これら2理想像の特徴は共通して見られたが，［可能自己像］については，〈落着き〉以外の特性をバランスよく併せ持ち，2つの理想像を折衷した形を示した。

③現実自己像と他の3イメージとの差異得点，および自尊感情との相関

［現実自己像］と他の3イメージとの項目得点間の差（絶対値）を合計し，①と同じく分散分析を行った。その結果（TABLE 2），［社会—現実：社会的理想像と現実自己像の差異を意味する。以下同様に略記］は，問題の有無による主効果が見られ（$F=12.61$, $p<.01$），一般群のほうが大きかった。［個人—現実］［可能—現実］は年齢による主効果が有意で（それぞれ，$F=4.69$, $p<.05$; $F=8.47$, $p<.01$），ともに年長群のほうが大きかった。さらに群別に差の検定を行った結果，この差は主に一般群の特徴であることが示された。

次に，この差異得点と自尊感情得点との相関係数を調べたところ，非行年少群は［社会—現実］で負の相関傾向が見られただけであった。これに対し，非行年長群および一般群の年少・年長各群については，3差異得点とも有意な相関が見られたが，なかでも［社会—現実］は最も強い相関を示した。またこれら3群の結果を比べると，統計的には有意な差ではないが，非行年長群＜一般年少群＜一般年長群の順序で負の相関が強まる傾向が見出された。

TABLE 2 非行群・一般群の年齢別イメージ間の差異得点，および自尊感情得点との相関

	非行群		一般群		分散分析		
	年少群	年長群	年少群	年長群	問題	年齢	交互作用
〈差異得点〉							
社会—現実	4.20(2.42)	4.66(2.59)	5.03(2.37)	5.45(2.65)	12.61**	3.73+	ns
個人—現実	4.08(2.41)	4.38(2.18)	4.32(2.23)	+4.80(2.31)	ns	4.69*	ns
可能—現実	4.94(2.51)	5.00(2.58)	4.71(2.22)	＜＜5.59(2.81)	ns	8.47**	3.36+
〈自尊感情得点との相関〉							
社会—現実	−.182+	−.264**	−.298**	−.373**			
個人—現実	ns	−.218*	−.232**	−.301**			
可能—現実	ns	−.243*	−.262**	−.277**			

注）非行群・一般群内での年齢群間差の検定の結果，＜＜は1％水準，＜5％水準，＋は10％水準での有意差を表わす。

（**：p+01 *：<.05 +：p<.1）

④自尊感情得点を目的変数，現実自己像の因子得点を説明変数とする重回帰分析（TABLE 3）。

自尊感情得点に対する［現実自己像］の5因子得点の影響力を調べるために，自尊感情得点を目的変数，現実自己像の因子得点を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果，非行年少群では〈強さ〉と〈外向性〉とがやや弱い影響を持つのに対し，年長群では〈柔和性〉がやや強い影響を持ち，〈強さ〉〈外向性〉〈落着き〉も弱い影響力を有することがわかる。一般群では，年少群・年長群とも共通して〈強さ〉の影響力が大きく，〈まじめ〉がやや弱い影響力を示した。

TABLE 3 自尊感情得点を目的変数，現実自己像の因子得点を説明変数とする重回帰分析（標準偏相関係数）

	非行少年		一般少年	
	年少群	年長群	年少群	年長群
強さ	2.29*	2.07*	5.96**	6.04**
柔和性	−.16	3.10**	.82	−.42
外向性	2.24*	2.05*	.87	.51
まじめ	1.98+	1.20	2.71**	1.98*
落着き	1.30	2.00*	−.64	−.45
重決定係数R^2	.295	.325	.307	.365

（**：p<.01 *：p<.05 +：p<.1）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

考　察

非行群の検討に先立ち，まず一般的な発達経路を把握しておきたい。

一般年長群と年少群との間で差が見られたのは，2つの理想像および可能自己像の〈まじめ〉〈落ち着き〉〈柔和性〉で，ともに年長群のほうが高い。これらの得点は，10代・20代の青年期より30代以降で高まる（伊藤, 1993b）ことを考え併せると，この3因子は成人期的特性であり，成熟の指標になりうるといえる。さらに，理想像・可能自己像と現実自己像との差異も年長群のほうが大きい。つまり，一般年長群は年少群に比べて，とくに成熟に関わる特性において，より高い理想像を抱き，自らの可能性に対しても肯定的な評価をするが，その結果，それらと現実自己とのギャップは広がることになる。

次に質的内容的な特徴に注目する。まず［社会的理想像］は，年少・年長群とも〈強くてまじめ〉，［個人的理想像］は〈柔和で外向的〉という特徴を有し，2つの理想像は質的に異なることがわかる。［可能自己像］については，年少群では“強さとまじめさが高い”という点で［社会的理想像］に近いが，年長群では柔和性が高まりまじめさが低下した結果，2つの理想像を折衷した形のプロフィールに近づく。年長群のこの結果は，健康な発達においては，社会的理想像と個人的理想像とが統合された形で願望的将来像に結びつけられていく過程をたどることを示唆していよう。一方年長群の現実自己像からは，“外向性が弱まり，まじめさや落着きが増す”というように，成人期的な特徴を強めていくことが読み取れる。

この一般群がたどる発達経路（2つの理想像の分化，この2つを統合した形の可能自己，現実自己像の成熟）を踏まえたうえで，非行少年の特徴について考えてみたい。ここで非行群に特徴的なのは，年少群と年長群との間で得点差が見られないことである。このデータは横断的なものであり，連続的にとらえることはできないが，一般群が年齢に応じた成熟へのプロセスをたどるのに対し，非行群の場合は発達的な停滞傾向が見られることを示唆するものと解される。

そこで次に，得点に表われた非行群と一般群との差異に注目する。ただし，ここで検討の対象としているのは2群の平均得点であり，以下に述べるそれぞれの特徴はあくまで両群の平均像である，という点については十分留意しておきたい。

まず［社会的理想像］においてはその差が大きく，〈強さ〉〈まじめ〉で非行群のほうが低い得点を示した。また［個人的理想像］の〈柔和性〉においても非行群のほうが低得点であった。これに対し，［可能自己］の〈柔和性〉では非行群のほうが高く評定した。また［現実自己像］では顕著な差が見られ，非行群のほうが〈強くて外向的でかつ柔和〉な特性をより高く認知していることがわかる。この結果を概観すると，非行群は相対的に低い理想像とやや非現実的な高い自己（現実自己・可能自己）イメージを有するといえよう。

さらに4イメージそれぞれの内容的特徴に注目すると，非行年少群の［社会的理想像］［個人的理想像］は，ともに〈強さと外向性〉が高く，一般群で特徴とされた“2つの理想像が分化する現象”は明確には見られない。しかもこれら2理想像は，一般群が示す［個人的理想像］に近い。この結果は，非行年少群には，社会規範や社会的期待を自らの個人的な理想とは別のものとして認知できていないものが多いことを示唆するものといえる。一方，年長群の2理想像のプロフィールは一般群のそれに近くなっており，2つの理想像が認知的に分化されつつあることがうかがえる。また［可能自己像］については，一般群では2つの理想を折衷した形に近づく。これに対し，非行群では年少・年長両群とも，とくにまじめさや落着きという成人的特性において，理想像より極端に高く評定することにより，可能自己と現実の自己とは全く逆の特徴を持つプロフィールとなっている。この結果は，非行少年の将来の見通しが，一般群に比べて，現在の自己概念に基づかない願望的で非現実的な傾向にあることを示唆するものと解される。

ところで，“社会規範からの逸脱”を意味すると想定された社会的理想像と現実自己とのギャップについては，社会的理想像を低く認知しかつ現実自己を誇大視する非行群のほうが小さかった。この現実自己に対する誇大視は，非行少年のほうが“（自己概念SD尺度に対し）肯定的で極端な反応をする”という結果（上田・玉瀬・相崎, 1967）と合致する。ただし因子レベルで検討すると，プロフィールに見られるように，非行群の理想と現実の接近は〈強さと外向性〉のみで見出され，成人的特性である〈まじめさや落着き〉では大きな差異のあることがわかる。これは“攻撃性や衝動性”という非行少年に特徴的とされる特性においては，ほぼ理想に近い自己像を描くが，一方“まじめや落着き”という成人的特性では，理想との懸隔が大きいことを意味している。つまりこの結果は，非行少年には，自我親和的な枠の中では極端に順応的・自己肯定的であるが，自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

我違和的なおとなの規範に対しては逸脱傾向が強いという極端化傾向を示すものが，相対的に多く見られることをうかがわせるものといえよう。

さらにここで留意すべきは，“逸脱行動の相対性”(兼頭, 1979)である。つまり，大人社会の法規範から見て逸脱とされる非行という行為も，今回の結果が示すように，非行少年自身の規範意識を基準に見ると全面的に逸脱しているとは言い切れない。このことは，一般群との得点差を指摘するだけではなく，非行少年個人の内的構造における特殊性を検討することの必要性を示唆していよう。そこで次に，自尊感情得点との関連について考察する。

Rogers(1951)の自己理論によると，自己概念における理想と現実のずれが不適応の原因といわれ，このずれの解消が心理治療の目標とされる。つまり，理想像と現実自己像の調和的接近が適応の指標になるといえ，この理論は椎野(1966)などでも実証的に確認されている。そこでこの理論に基づき，適応的で健康な自己概念の指標として自尊感情を取り上げ，ずれと適応との関連から両群の内的メカニズムの違いを検討したい。

まず自尊感情得点そのものについて見ると，一般—非行群間でも年少—年長群間でも有意な差は見られない。ところがずれとの関係については，一般群と非行群との間で次のような違いが見出された。一般群では年齢に関わらず，両者の間に有意な負の相関が見られた。また，3種類のずれを比較すると，社会的理想像とのずれが相対的に強い影響力を持つが，3者間に顕著な差は見られないことがわかる。この結果は，理想からのずれが小さいほど自尊感情が高まると解され，Rogersの理論(1951)を支持するものであった。これに対し，非行年長群も一般群と同様の傾向を示したが，その関連は相対的に弱い。一方，非行年少群では両者の間に意味ある関連は見出せなかった。これは，非行年少群の場合，理想像への接近が自尊感情の高まりにつながらない，つまり，理想像が自己の準拠枠として十分に内面化されていないことを示唆するものと解されよう。

ところで，中学・高校・大学生男子を対象に，理想自己と現実自己のずれと自尊感情との関係を調べた岡田(1987)によると，高校生以上では両得点間に有意な負の相関が見出されたのに対し，中学生では関連が見られないことが報告されている。さらに伊藤(1993b)では，30代以降の男性においても両者の間に相関が見られないことが示された。つまり，ずれと自尊感情との関係構造にみる非行年少群の特徴は，青年期前期にあたる中学生男子と，青年期に後続する成人期のそれと類似していることになる。ただしその他の結果を鑑みると，中学生の場合は“理想像が自己評価の基準として十分機能していない”(岡田, 1987)という未熟な状態にとどまると解釈されるのに対し，成人の場合は“社会規範を取り入れた理想像に向けて自己を適応させていくと同時に，ずれへのとらわれから解放されていく”(伊藤, 1993b)という人格の成熟の一面を示唆する結果であると考察されている。つまり，両者の間には質的発達的な違いのあることがうかがえる。これらの結果は，異なる被験者を対象にした調査によるものであり，年齢による差異を時系列上の変化としてとらえることには十分な吟味を要すると思われるが，以上の結果をもとに，男子の発達的変化を考察しておく。青年期から成人期にかけての変化を総括的にとらえると，“個人的な理想と社会的規範を分化してとらえる段階”を経て，はじめて理想像の統合に至るのであり，ずれにこだわり現実を理想に近づけようと努力する過程を経ることによって，そのずれからの超克という成熟段階に到達しうるという図式が浮かび上がる。この図式に従うと，現実自己への誇大視と未分化な理想像を特徴とする非行年少群の場合は，年齢的には高校生に相当するにもかかわらず，自我発達の面では，青年期的な課題に直面する以前の未熟な段階にとどまっているものが多いと解されるのではないだろうか。

次に，現実自己のいかなる側面が高い自尊感情をもたらすのか，つまり自己のどんな特性が重要視されているのかについて検討した。先述の理想像が，客観的に認知された準拠枠を反映するのに対して，自尊感情との結び付きからは，より主観的な自己概念の枠組みが明らかになると考えられる。

まず一般群では，年齢に関わらず，社会的理想像に特徴的な〈強さとまじめさ〉が自尊感情を高めるという安定した結果が得られた。結果に示されたように，自尊感情得点に対しては，社会的理想像とのずれが相対的にやや強めの影響力を持つことを考え併せると，自己評価の高さに対する外在的な社会規範の拘束力は，大学生になっても維持されるものと解される。

これに対し，一般群との明らかな違いとして指摘されるのは，非行少年のまじめさに対するとらえ方が肯定的ではないという点である。この現象は，規範からの逸脱という非行行動への素地を提供する要因の1つになっているといえる。さらに非行年少群では，強さと外向性という，現実自己としてすでにそなわっている特性が自尊感情を支えるが，その影響力は弱い。一

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

方，非行年長群は他の3群と異なり，〈まじめ〉以外の4因子がすべて自尊感情の高まりに関与し，〈柔和性〉と〈落着き〉による影響力がもっとも強い。ところが，この〈落着き〉という特性は，理想像においても可能自己像においても最も低い得点しか与えられていない。

以上の結果から，非行群の総合的な特徴をまとめておく。まず年少群では，社会的理想像と個人的理想像とが未分化であるだけでなく，それらは自己を評価するための基準（準拠枠）としても十分統合的に機能していない。また将来の可能性は，現在の姿とは全く異なるものとして極端に高く見積もられ，しかも自己像に関しては現状肯定的・楽観的である。一方年長群では，自己の可能性に対する非現実的な期待を有しているという結果は，年少群と共通する。ところが，2つの理想像が異なるものとして認知され，しかも，これらと現実自己とのずれが自己への評価に影響を持ち始めているという点で，理想像の分化と内面化が進みつつあると解される。しかし，自尊感情を高める特性における一般群との差異，およびそれらの特性と，理想自己像として高く評価された特性との食い違いを考慮すると，これらの認知された理想像が，自己評価のための基準として統合的に機能しているとは言い難い。

ところで一般群の結果に見るように，認知発達理論でいわれる“他律的規範から自律的規範へ”という青年期の発達経路は，他律的外在的な社会規範からの拘束を脱して，自律的な独自の理想に乗り換えていくという直線的な変化ではない。外在的な社会のルールを絶対的な基準として認識しそれに拘束されつつも，その一方で自らの理想を確立し，これらの拮抗する準拠枠を統合的に内面化しながら，将来目標や可能性を構築していくという複線的な過程であるといえよう。この青年期的特徴と照らし合わせることにより，非行少年，とくに，非行年少群の自己誇大視・楽観視，社会規範意識の低さや個人的理想像との未分化，さらにはそれら理想像の内面化の弱さという前慣習レベルの特徴が浮き彫りにされるのであり，この点にこそ，発達という時系列の中で非行現象をとらえる意味があると考える。

以上のように，本研究では2つの理想像を操作的にとらえ，両者と現実自己像との関連に注目した。ただし，これらの尺度がとらえうるのは，各概念の一側面であるという測度の限界を見極めたうえで，方法論的にも，多方面からのさらなる検討が求められよう。

また本論では，一般群 vs 非行群，年少群 vs 年長群の比較という手法で，非行行動の心理的メカニズム，さらには発達的特徴を論じることを試みた。ただし，非行という概念そのものが不明確さを帯びたものであり，“何をもって非行とするかは時代により社会により異なる”(井上, 1980)。つまり，非行を法的ラベルとみるか，社会に及ぼす実質的危害という点から行動本位にとらえるかによっても，“非行”と“一般”との境界はおのずと違ってくると考えられる。さらにまた，罪種が違えば“質的に異なる行動類型と発生機序を持つ”(井上, 1980) という視点を加味すると，年齢による差異をそのまま発達差と解するのではなく，別の関連要因による補足的検証が必要となる。今回の結果を過度に一般化・普遍化することの危険性に留意しつつ，データから得られた一般群・非行群それぞれの発達モデルの妥当性を確認するためにも，先の方法論的問題を含め，質的データや面接法を取り入れるなどによる全体像の把握が，今後の課題として求められよう。

引用文献

Hudgins, W., & Prentice, N.M. 1973 Moral judgment indelinquent and nondelinquent adolescents and their mothers. *Journal of Abnormal Psychology*, **82**, 145—152.

井上公大 1980 非行臨床—実践のための基礎理論 創元社.

伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想-現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, **40**, 164—169.

伊藤美奈子 1993a 個人志向性・社会志向性から見た非行少年の自我構造 心理臨床学研究, **11**, 36—43.

伊藤美奈子 1993b 個人志向性・社会志向性の発達的研究 教育心理学研究, **41**, 293—301.

兼頭吉市 1979 非行の一般化傾向 家庭裁判所現代非行問題研究会編 日本の少年非行 大成出版社

小林 裕 1989 非行少年の道徳判断(2) 犯罪心理学研究, **27**(特別号), 14—15.

Kohlberg, L. 1964 Development of moral character and moral ideology. In M.L.Hoffman, & L.W.Hoffman (Eds.) Review of child development research, Vol.1. New York : Rusell Sage Foundation.

Masterson,J.F. 1972 成田善弘・笠原 嘉訳 1978 青年期境界例の治療 金剛出版

二宮克美 1991 規範意識の発達および非行問題と道徳性との関係 大西文行編 新児童心理学講座

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

第9巻 道徳性と規範意識の発達 pp.203—242. 金子書房

Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible self. *American Psychologist*, **41**, 954—969.

大橋靖史・鈴木明人 1992 非行少年の可能自己と時間的展望 犯罪心理学研究, **30**(特別号), 74—75.

岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116—121.

Oyserman, D., & Markus, H. 1990 Possible selves and delinquency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 112—125.

Piaget, J. 1932 The moral judgement of the child. New York : Free Press. (大伴 茂訳 1956 児童道徳判断の発達 同文書院)

Rogers, C. 1951 Client-centerd therapy. Boston : Houghton.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press.

斉藤文夫 1983 受刑者を対象とした質問紙調査法における回答の歪曲に関する一考察, 犯罪心理学研究, **20**, 19—32.

齋藤久美子 1990 青年期心性の発達的推移 臨床精神医学, **19**, 727—732.

椎野信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究, **14**, 165—172.

清水将之 1985 学校・社会と思春期問題 作田勉・猪股丈二編 思春期対策 誠信書房.

総務庁青少年対策本部 1989 規範意識と非行の深化との関係についての研究調査 大蔵省印刷局.

鈴木慎吾・西村春夫・高橋良彰 1989 高校生における非行化の条件 西村春夫編 少年非行—その実態・原因・対応の分析— ソフトサイエンス社.

高橋英司 1978 非行少年の人格研究における2,3の問題 犯罪心理学研究, **15**(特別号), 14.

栃尾順子・花田知津子 1991 女子非行少年の自我発達水準の検討—Loevinger の自我発達理論に基づいて— 教育心理学研究, **39**, 324—331.

上田敏見・玉瀬耕治・相崎戦太郎 1967 非行少年と普通少年の自己概念の比較 臨床心理学研究, **6**, 164—170.

付 記

本論文の作成にあたり，ご指導いただきました京都大学教育学部教授 齋藤久美子先生，ご教唆くださいました新潟大学教育学部助教授 岡田努先生に心よりお礼申し上げます。また，元大阪少年鑑別所所長酒井汀先生（現大谷大学教授）および技官の先生方には，調査のご協力に加えて有益なご示唆を頂載いたしました。記して厚く感謝いたします。

(1994.6.21受稿，8.18受理)

NII-Electronic Library Service